

特集

着床前診断 —現状と近未来の方向性—

企画者のことば

末岡 浩*

近年、医療のなかで遺伝学的な情報はますます重要な意味をもつようになりつつある。生殖医療の分野においてもその意義は極めて大きく、直接的にかかわる事項である。次世代の健康な生命の誕生を願う両親や、それを支える産婦人科医にとっても、これは最も重要な課題の1つである。急速に発展する新たな知識を常に理解し、診療に生かしていくことが求められている。

近年、生殖医療と遺伝医療をつなぐ新たな医療技術の成果として、胚からの遺伝子診断が大きなエポックを切り開こうとしている。対象によって、手法にも、また社会倫理的な議論のなかにも異なる課題が存在する。生殖医療の発展・普及のうえで、さらに急速に進んだ遺伝子診断の技術は網羅的に幅広く遺伝子解析を可能としつつある。知りたい情報のみならず、必ずしも期待しない情報をも解析することにつながるものが懸念され、情報の管理や開示、移植胚

の選択に至るまで今後の検討課題は広がりつつある。その一方で、診断の精度についての課題はなお多く存在する。胚の不安定性や遺伝子増幅に関する課題など、不明な点も少なくないといわれている。胚の染色体異数性に対するPGT-Aはまさにその議論のなかにあり、今後の検証が待たれるところである。さらに、生検を伴わない非侵襲性の着床前遺伝子診断も新たな選択肢として開発されつつある。期待するところは多大であるが、日進月歩の新たな技術に基づくこれらの技術をup to dateに理解することは容易ではない。今はまさに研究から臨床技術へ転換するプロセスにあるといえよう。

本特集企画において、われわれ産婦人科医が広く理解しておかなければならない着床前診断の知識を専門領域の先生方にまとめていただいた。読者の理解を深める一助となれば幸いである。

* Kou Sueoka 慶應義塾大学医学部臨床遺伝学センター